

自問教育の会



EOSA Education of Self-Asking

発行日：2014（平成26）年7月27日 No.6

発行者：自問教育の会（会長：小林慎一）

編集：自問教育の会事務局（丸山 斉藤 白澤 吉川 片岡）

事務局：長野県塩尻市大字大小屋61番地 塩尻市立塩尻中学校内 丸山博

連絡先：TEL0263-52-7852 FAX0263-51-1600

URL：<http://jimon.3zoku.com/>

問い合わせ先：<http://jimon.3zoku.com/php/sformmail.html>

新会長挨拶

自問教育の会会長 小林 慎一

昨年11月、松本市立会田中学校にて開催された第22回全国自問教育の会は、全国からの多くの皆さんのご参加をいただき充実した会となりました。私自身も、会田中学校の生徒の皆さん、そして参加された皆さん方から感動と勇気をいただきました。ありがとうございました。さて、開催日当日の理事会の席で、先輩の理事の先生方から「会長に」とのご指名をいただきました。私にとって自問教育は、子どもと向き合う教師としてのあるべき姿を、また人間としてのあり方を語りかけてくれるものです。そして、今だ人として未熟な私に生き方を教えてくれるものでもあります。そのような私が会長として先輩方が築きあげた歴史ある自問教育の会を推進していくことなど果たしてできるものなのか、何度も自問自答いたしました。しかし、目を輝かせながら実践を語り合う皆さんの姿や目の前で生き生きと清掃に打ち込む生徒の姿が私の背中を押してくれました。子どもたちと向き合い語る私、職員と教育活動について話し合う時の私、その私の言動や行為の根っこは、振

り返ってみるとこの自問教育であり、本物の教育がここにあると感じています。この自問教育がさらに広まり発展していくことを願って、自分なりにこの大役を務めさせていただきたいと思います。とはいえ、繰り返しになりますが未熟者の私です。成長途上の私ですので、今後とも皆さんの実践から学ばせていただき、支えていただきながら務めさせていただきます。どうかよろしく願いいたします。

申し遅れましたが、私は現在長野県上田市立丸子北小学校に勤務しております。教師生活最後の年となりました。子どもたちや先生方を前にして正直な自分でありたいと思っています。また、これまで出会ったすべての人に対して感謝の気持ちを持って最後の一年を送りたいと思いながら毎日を過ごしています。このような私ですが、できるだけ皆さんの負担にならないように努力していきたいと思いますので重ねてご支援ご協力をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

第22回全国自問教育の会の報告

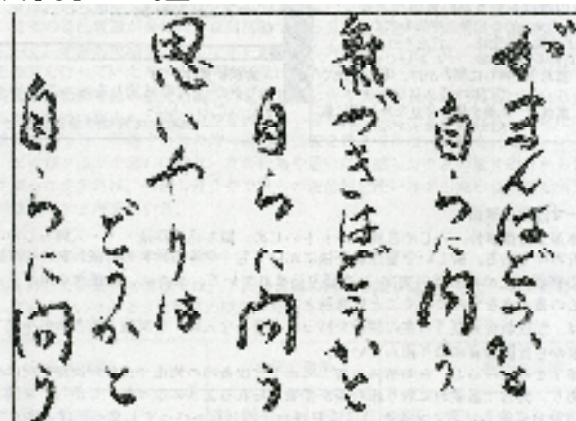
研究テーマ

『自分の行為を振り返りながら自立していこうとする生徒を育てるには どうしたらよいか。』 ～自問ノートの教材化を通して～

平成25年度の全国自問教育の会は長野県松本市立会田中学校での開催でした。会田中学校の学校目標は「自主の精神を持った心豊かな人間」です。その実現を目指す手立てのひとつとして、平成24年度より取り組み始めて自問教育の実践を通して学び合うことができました。

今回も清掃参観後、自問ノートを活用した道徳の授業を参観し、授業と子供の事実を通してながら、自問清掃のあり方について討議することができました。その後、実践交流を行い、熱のこもった話しは場所を変えて夜遅くまで行われました。

2日目は、講演会とレポート発表による実践交流会で学びを深めていくことができました。講演会は、石川県野々市市立野々市中学校長の橋口有康先生より、自問教育と出会いそして校長として実践してきたことをもとに感動的なお話をいただきました。実践交流会では、1日目と合わせて、7本のレポートが集まり、多くの実践から学ぶ機会となりました。



○清掃参観

・清掃前の話 清掃主任 丸山 博

○道徳の時間授業公開 授業研究会

・主題名「自問の心」

指導者 前自問教育の会会長 鎌倉 正之

授業者 2年1組担任 小林 拓也

○開会行事

全体司会 自問教育の会理事 小林 慎一

開会の挨拶 自問教育の会会長 小島 信由

会場校挨拶 会田中学校長 丸山 勝久

○実践交流会 I

○情報交換会(松茸山荘)

○講演会

全体司会 自問教育の会理事 平田 治

講師 野々市中学校長 橋口 有康

○実践交流会 II

○実践交流会 III

○閉会行事

講演会

演題「自問教育との出会い」～校長としての実践化～

〈講師〉

石川県野々市市立野々市中学校長

橋口 有康先生



〈講演の概要〉

【光野中学校での実践】

2007年(平成19年)4月、新校長として赴任。

前年度まで数年間にわたり荒れた学校として数多くの問題行動があり、地元の新聞に何回も事件が掲載された学校であった。

前年度、校内で発見されたタバコ644本、吐き捨てられたガム1748個。

先生方は、床にこびりついたガムを取る名人になったそうだ。

平成19年度 文科省指定の道徳教育研究校の指定校

→やるからには正常な教育活動が実践される学校にしてやる。

4月2日。ベランダで火を燃やす事件を学校を建て直すチャンスと捉える。

「ダメなものはダメなんだ」という毅然とした学校の姿勢を示すことが私の方針。

どんなに生徒が反発し、暴言を吐き、暴力行為に及ぼうとも「ダメなものはダメなんだ」ときっぱり否定し、問題行動をやめされるために、可能な限りの対策を実行する姿勢のこと。

しかし…

毅然とした指導だけでは、学校は良くならない。それとともに生徒の内面的な成長も促す取り組みもしていかなければならない。

道徳的実践力を高める手だてはないかと考えたときに、恩師が自問清掃ということを書いていたのを思い出した。

生徒指導主事に「自問教育の実践」「自問活動の

すすめ」の2冊を渡し、自問清掃に取り組みたいことを伝える。全国自問の会に参加し、「校長先生、これをやりましょう。」ということになった。

12月に平田治先生を招き校内研修を行った。

その頃問題行動も収まり、掃除もそれなりにできるようになっており、職員の中にやっと落ち着いたという安堵感があった。自問清掃への反対表明があった。

「道徳的実践力をつけていくために、別の手立てがあるならば示してもらいたい。1カ月待ちます。」

生徒達、先生方に対して、「教育の目的」を知った上で、日々の学校生活を過ごしてほしい、目的のわからない毎日で、「心」が育つはずはありません。「教育の目的」とは、「なぜ学ぶのか」ということを知った上で日々の教育活動、学校生活を送ってほしいという願い。校長道徳の実践。

平成20年4月。3年修学旅行が終わり全校一斉に自問清掃を開始。

職員に対して7時間分の自問清掃取り組みの指導案と板書計画を提示。職員もそれに応え、より生徒の実態に添ったものになるよう修正を加え実践したくれた。

夏休み。長野県丸山先生の来校。校内研修実施。

自問清掃の根幹は、「自発性の発露」「自発的行為を信じて待つ」「目的、目標、条件ルールを教師が混同して指導してはいけない」。繰り返し説得する必要がある。

平成21年度から「自問だより」を発行。

平成22年度、生徒指導困難校 野々市市立野々市中学校への異動。

【野々市中学校での実践】

掃除の音楽を止めるところから種まきを始めた。

8月23日。平田先生を講師に招き校内研修。

9月15日。「掃除革命」と題して校長自らプレゼンを行い、自問清掃を行うことを生徒に宣言する。

9月20日～10月8日。自問清掃プログラム学習を全クラスで実施。

イエローハット創業者の鍵山秀三郎氏を招いて「ひとつ拾えば、ひとつだけきれいになる」と題しての講演会を行った。

24年度、県指定のいしかわ道德教育推進事業「人と地域を生かした道德教育講座」と合わせて第21回全国自問の会を開催。

この年度に卒業していった生徒が「自問清掃の振り返り」を書いてくれた。それを読んだとき、「よくぞここまで成長してくれた。自問清掃をやってよかった。」と改めて思った。

私は、心の教育は「生き方教育」でもあると考えている。自問清掃をさらに前進させるためのひとつの方法として「人がどのようにして生きているのか」を作り話ではなく、実話として子どもたちに示すことも大切なことだと思う。どのような生き方を示せばいいのか。①「一生懸命生きる」②「仕事に賭けて生きる」③「人

のために生きる」私が実践したのは「一生懸命生きる」ことである。

【自問清掃を続けていくために】

継続していくには、常に研修を重ねていかなければ、形だけのものになってしまい、最後には、やらなくなってしまうと思う。校長自身が自問の良さを認識していれば、続いていくと思うが、校長にその気がなければ確実につぶれていってしまう。そうならないためには、職員の自問に対する意識を高めるとともに、生徒にも自問清掃の良さを実感させていく必要がある。

この取り組みは、派手なものではないので、大きく広まることないと思っている。しかし、良いものは良い。だから、これに携わった者は、どんなに困難があろうがやっていかなければならない。子どもの姿で勝負しなければならない。

私達が取り組んでいる自問清掃は、日々の道德的実践活動の場となっており、また道德の時間で自問ノートを活用することで、道德の時間が道德教育の「扇の要」として、補充・深化・統合の場となり得る形で見事に具現化していると思う。

詳細な講演記録と講演資料は事務局にございます。1時間の感動的な講演内容の詳細をお知りになりたい方は、事務局までご相談ください。

全国自問教育の会実践交流会

5本の実践発表と2本の意見発表による実践交流会を1日目と2日目に分けて行われました。発表されたレポートの概要を紹介します。今回の実践交流会も多岐にわたる内容で、充実したものとなりました。発表されたレポートの概要を紹介します。



〈実践発表1〉

長野県北相木村立北相木小学校

新津 由紀先生

「自問清掃の取り組み」

～北相木小スタイルの自問清掃

5年目の様子と課題～

2009年

職員会議で提案、職員研修、参観日の校長講話

3学期より全校児童で開始

2010年

グランドデザインに位置付ける
校務分掌に位置づける
参観日の自問清掃参観を位置づけ
職員研修，校長講話

2011年

教育活動の土台に位置づける
自問清掃部会（研究部会）を立ち上げる
鎌倉先生のご指導
自問集会の立ち上げ

2012年

自問清掃の見直し
低学年は担任が掃除のやり方を教える
3年生以上も清掃指導を取り入れる必要があるのではないかという意見

2013年

校務分掌見直し
自問清掃係（主任＋連学年1人ずつ）
掃除の仕方を学ぶ全校集会
自問清掃オリエンテーションの実施（全校）
がまん清掃の実施
しんせつ清掃オリエンテーション（連学年）
しんせつ清掃実施

○成果と課題

- ・自問清掃を導入した校長先生が転任し，その熱い想いを全職員で引き継ぐことが課題だった。
- ・新任職員の自問清掃への理解をどう深めるか。
- ・教育活動の土台とするには，工夫が必要。
- ・1，2年へは清掃指導が必要という考えにまとまった。
- ・清掃の基本的なやり方を指導した。
- ・「褒めない」を緩め，どんどん褒めるようにした。
- ・雑巾を使わない子どもの姿から一生懸命やっているように見えて，実は楽な掃除を選んではいないか。
- ・自分と向き合わせる支援はどうあったらよいか。
- ・なかなか難しい師弟同行
- ・信じて待つ…本当にそれでよいのか
- ・自問清掃で子どもたちは本当に育っているの

かという地域が目

〈実践発表2〉

信州大学教育学部教授

土井 進 先生

「自問清掃」1450回の実践による

学生の教職への使命感の自覚

お茶の水から信州へ

お茶の水のある教授の励ましの言葉

「あなたはお茶の水にいるより，信州教育の地で教員養成に携わる方が有意義であると思う。信州という地は教育について熱心な土地柄であるから大変だと思うが，あなたは「実践」で来ている人だから「理論」の人に負けません。じっと聞いていなさい。」

竹内隆夫先生との出会い

平成4年8月30日（日）読売新聞紙上にて竹内隆夫先生と出会う。竹内先生の実践の根底に流れる深い精神性と哲学性を学びたいと願い，信州大学教育学部へ足を運んでいただいた。自発的に取り組む自問清掃を1450回大学で取り組んできた。

信大 YOU 遊の精髓は学生の「ずく」

「もっと子どもたちと触れ合って，子どもたちとの関わりのあるあり方について実践的に学びたい」という学生自身の要求から生まれた。大学のキャンパスに子どもたちを迎え，学生たちが思う存分子どもと触れ合うことのできる「信大 YOU 遊サタデー」が実現した。

「自問清掃」「信大 YOU 遊」を実践した学生の全国教員採用試験合格率は81.4%

〈実践発表3〉

長野県松川町立松川中学校

今村 哲也先生

「松川中の自問清掃の実践」

「自問清掃」は清掃教育ではなく，自らの心と向き合い，問いかける行為を通して心を磨いていく「道徳教育」である。

○自問清掃15年目の歴史。

○指導のポイント

- ①自発性を信じて待つ
- ②ほめない・しからない・比べない
- ③全職員で自問清掃を行う
- ④自問清掃前に職員は教室に行き、身支度を
確認する。職員の合図で清掃に取りかかる。
- ⑤自問清掃の良さを伝える

〈実践紹介〉

- ・自問集会
- ・全校縦割り自問清掃・分担なし清掃
- ・職員自問研修の実施
- ・自問放送・自問カード

〈意見発表1〉

埼玉県自問教育研究所

鈴木 秀三郎先生

「法華経観に基づいた子供の育て方」

自問清掃実践のあゆみ

- ①心の荒みは諸悪の根源
- ②自問清掃を始めた頃の学校
- ③S 中学校 5年間の自問清掃の歩み
- ④H 中学校の自問清掃の歩み
- ⑤S 小学校 3年間の自問清掃の歩み

〈実践発表4〉

山口県和木町立和木中学校

大廣 紘巳先生

「一点突破から全面展開へ」

○成果

- ①昨年度よりも活動時間中の私語をがまんできる生徒が増えた。
- ②引き続き全体的に学校がきれいになったと言われる。
- ③問題行動を起こす生徒が各学年とも一部に

限定され、概ね生徒全体が落ち着いた学校生活を送れている。

- ④学校が落ち着いてきたため、生徒の学力向上と学び合いによる授業づくりの研修に力を入れることができるようになった。

〈実践発表5〉

長野県諏訪市立高島小学校

片岡 聡矢先生

「小学校低学年（2年）における

自問清掃の導入の試み」

2学級ある学年での取り組み

- ①学年会における担任の学習会
(竹内先生の本会報掲載資料の読み合わせ)
- ②学年集会における自問清掃の導入
- ③清掃開始前の先生の話
- ④清掃の振り返りの時間（見つめタイム）
- ⑤見つめノートを活用した「道徳の時間」

〈意見発表2〉

長野県教育を拓く会

関 明夫先生

「自問教育の国際的視野の拡大を考える」

○ペスタロッチの教育思想と自問教育の背景にある考えが類似

- ①人間の心の奥底の本質の安らぎを求めよ
- ②自然の道に従え
- ③近くの狭い範囲から始めよ
- ④本質の奥底から汲み取った真理は普遍的な真理である。
- ⑤急ぐなかれ。急ぎすぎるは安らぎと均衡を錯乱させる。

実践の中で

自らを高める自問教育



竹内隆夫先生

の手引き

新たな発想による清掃活動

—人としての成長を願って—

竹内 隆夫 著

<目次>

すいせんの言葉(第4号掲載)

1. 実践の場こそ(第4号掲載)
2. 紆余曲折を経て(第5号掲載)
3. 自由とは迷惑をかけないこと“人の痛みがわかる”(第6号掲載)
4. 心を汲む気働き“人の心がかくめる”
5. 創造と発見“人のねうちがわかる”
6. 感謝の心で増分との違いか許せる”
7. 正直ということ“胸に自分なりの尺度ができる”
8. 教師のあり方
9. 理念の背景

あとがき

3 自由とは迷惑をかけないこと

受賞のパーティーで高円(たかまど)の宮さんから、「どんな順にどうにゆうなされたんですか」と尋ねられました。まず第1段階は人のじやまをしないがまんを身につけようと思いました。

先生方に学級経営上の悩みを尋ねますと、まず第1に、今の子供は依頼心が強く、よくしゃべるが実践力が無くて困る、と言われます。過保護に育てられ、清掃中もよく人の世話はやく

が、苦勞な仕事はさけたがる。とりかかりは遅いし手を汚すことはきらいで、やる気のない子が目立つというわけです。提出物も期日には集まりにくく、宿題も言われたことしかやってきません。とにかく自発性に欠けていますから、やがて社会に出ても離職とか非行に走る者が多いでしょう。

中学生の女子に、将来結婚してご主人の食事の用意をして、帰りが遅くても待っていますかと質問すると、皆できますとこたえました。ところが、この夏休みに食事の手伝いをした者は

わずかで、自分の下着さえほとんど洗っていません。言うこととすることはこれほど違うのです。

そこで自発性が出るまでは先生方に一切世話をやくことをやめてもらい、やる気になるまでは待ち続けることにしました。全校朝会の講話は次のようにしました。

「人と動物の違いは一口に言えばどこでしょうか」と考えさせ、「動物の牛や馬は縄で引っぱられて働いていますね。人間には自発性があるから、ひとりもそんな人はいない。この自発性があるから、人に言われたりしなくてもできるのです。自発的行為こそ人間らしい行為なのです。人から命令されたり指示されなければ働けないようでは、人として恥ずかしいのです。そこで今日からは先生や班長からの指示や命令を一切辞めてもらうことにします。それは皆さんを人間として扱いたいからです。それで皆さんだけで掃除ができれば、皆さんは人間ということになる。はじめは仕事が見えないでぶらぶらする人がいるかもしれない。そういう人間らしい心遣いのできない人でも、きっと仕事が見えてくるはずですから、それまでまってあげることになります」

と、まず皆の前で提言しました。急に言われて先生方も戸惑いました。これまでの惰性で、ついほめたり叱ったりしました。先生方の声が消えるのにも、およそ1カ月はかかりました。うっかり先生が指示しますと、生徒も約束を忘れて、「先生、約束が違うよ」とか、「うるさいよ」などと注意もされたりもしました。

清掃には進行役を務める人が居て、指示する必要があると思う人も居ました。しかし皆が気働きさえよければ、中学年以上なら声を出さなくてもスムーズに進むものです。そしてこの約束が守れるようになると、清掃の場は静かになります。迷惑の声が消えるので、作業にも集中しやすくなるからです。

しかし、この約束だけでは話し声は消えませんが、うっかり世話をやく声もです。作業に打

ちこめない者ほど人の世話をやくものです。そこでさらに人権意識の問題として、角度を変えて説明しました。

民主主義を担う資格を

「わが国は戦前は全体主義の国でした。戦後は民主主義の国として生まれ変わったことは知っていますね。そして民主主義の基本は自由と平等であることも社会科の教科書に書かれています。ところがなぜ自由と言うのか。本当のわけはよくわかっていないようです。民主主義で言う自由とはどういうことか。ふだん先生が『自由に遊んでよろしい』と言う。その時の意味は好きなことをしてもいいという意味でしょう。しかし、もし日本中、皆で好き勝手に何をしてても良いということになれば、あちこちでわがままが衝突し大混乱となるでしょう。

今の日本にはそのようにこの意味をはき違え、平気で人に迷惑をかける人が現れています。アメリカの初代大統領が国をまとめるために、顔の色も言葉も違うけれど皆人間として自由に生きる権利があるのだから、その自由を犯さないようにしよう、という意味で自由宣言をしたのです。ですから本当の意味は自由を守り合うということで、人の自由のじゃまをしないという意味が強いのです。

清掃中のことと言えば、真面目に働いている人のじゃまをするな、ということになります。そういう世の中になれば、どんなに暮らしよくなるかしれません。きっと楽しい社会になるはずですが。

皆さんは、自由の意味を正しく理解し、日本を本物の民主主義の国にしてもらわなければなりません。自分にその資格があるだろうか、頭でわかっただけではだめで、実際にそのようにできる人にならなければいけない。

清掃中、真面目に働いている人にとって迷惑なものは話し声です。それは口を結んで仕事に専念した人にはよくわかることです。うっかりおしゃべりをしていていた人には、自分がじゃまを

していると思いませんからわかりません。掃除で迷惑をかけないがまんが身につけば、本当の自由がわかったことになるでしょう。

自問の清掃は民主主義を担う資格を身につけるための時間だったのです。

さて、清掃中にとりなりの教室から机を倒す音や戸をしめる音が聞こえてきます。このように物と物がぶつかる音は、たとえ大きくても迷惑は感じません。隣でよく働いているな、と感ずるだけです。なぜならその音には意味が無いからです。ところが話し声はどんなに低くささやいても、そこに意味があるから心を奪うのです。

たとえば私が床のよごれを除こうとしてる時、友達が横から『おい、こんどの日曜日に、サッカー選手が来るって』と言われたとします。好きな私はすぐ心を奪われて話したくなるでしょう。手もとまってしまいます。また先生が回ってこられて、ある生徒を見て『いい所に気がついたな』などとほめた場合でも、近くの人はそのっちを見たくなるでしょう。つまり話し声は、中身がよくても悪くてもまわりまで集中力をにぶらせます。どうしても必要な連絡なら、その人だけに聞こえるように言ってほしい。ですから、この時間は、自由を体でわかる人になるためのものなのです」

がまんの大切さ伝える

またさらにもっと理解を深めるために、脳の研究からわかったことから、がまんの大切さを説明しました。

「この頃脳生理学という学問でわかったことですが」と、人間の脳には生まれながらに誰しも140億もの細胞が授かっていること。そしておでこにあたる前頭葉には人間だけが持っている3つの働きの細胞がつまっていること。そのうちの創造力と情操については科学や芸術を生んできたことから、誰にもわかりやすいこと。しかしもうひとつの意志力というのはよくないことをがまんすると、よいことを進んでするやる気との両面があること。

また、皆が同じ数の細胞を持っていても、3歳頃までは細胞が離れていて、4歳頃から、本人の努力で細胞の間につながりが生じ、それが多くできるか少ないかで個人差が生ずること。最もよく発達する時期が小中学校の頃なので、皆さんの頃が最も大切なこと。などを図解によって説明しました。

「だから清掃中がまんしたりやる気になることは皆さん自身にとって有益な時間と受け止めてほしい」と説明しました。これは生徒達にとって耳新しく、しかも合理的なことから、有効な手だてとなりました。

しかし、これまでは談笑しながら働くことに疑問も感じていないし、成人も黙って働いているとは限らないので、静かな作業のイメージは持っていませんでした。そこでまず清掃開始のチャイムは身支度よりも口じたくと心得てもらい、最初の1分間だけでも迷惑をかけないがまんさせました。その後で「今日は1分間全校が静かでした。明日はもうちょっと長くがんばろう」と励ましました。私達はつい結果を急ぐあまり欠点の指摘が強くなりがちだからです。

もし、「1分しかできないのか」と言うことになると、それは外から圧力をかけたことで、自発的行為でなくなります。あくまで子供自身、これを身につけやすいようにこんどはステップを2つに分けることにして次の説明をしました。

「黙ってやろうと思って始めても、ついしゃべってしまい、集中しにくいようなので、黙ることと働くことをべつべつに身につけることにしよう。掃除の時間なので、働くことの方が大事だと思っている人が多いでしょうが、実は皆さんの将来のためにはがまんと身につける方が大事です。ですからこの時間、黙ることから先に身につけることにします。そこで、どうしても口を開いてしまう人には仕事をやめてもらい、皆のそばから離れてもらうのです。うっかりしゃべっている人の肩を軽くたたいて合図をしますから、人のじゃまをしないで働けそうになったらもどることにします。仕事を辞めることは、

働いている人に申しわけないことですが、まずはまんの修行にはいることなので許してあげましょう」と提案し、私が肩を触れて歩くことにしたのです。意外な提案なのでげげんに思ったようでした。大勢仕事から離れたら掃除にならないと心配になったようです。そこでさらに「とにかく終わりのチャイムが鳴ったら、未完成のままでも道具を始末して終わりとしましょう。多少の汚れはがまんしよう」と言いました。

一切指示命令はしないことでスタートしましたが、人への迷惑だけは許せませんので肩をたたいて伝える方法だけは苦肉の策でした。こうして働く場所の声が消えたと思っても、ふりむくとまた声が出るのです。やむを得ず肩をたたき係りは校舎ごとに増員しました。

働き手が少なくなったクラスは教室の汚れも目立ってきました。腰をおろしながら話しをしてはいけないので1メートル離れることにしました。汚れのひどくなったクラスの担任が相談に来ました。

「ひどい汚れです。見に来てください」と言われ、見に行きました。男子はほとんど休んでいました。その中でわずかの者が働いているのです。休んでいる生徒を見ながら歩いていくと、生徒は悪びれたように顔をそむけます。私は「もっと胸を張って姿勢をよくして休みましょう。がまんを身につけようとして修行しているんですから」と、いちいち背筋を伸ばさせました。堂々とした姿勢で働く友達を見ているうちに次々と立って働く側にもどっていきました。こうして働く者が半数ほどになると仕事もはかどり、静かに働く雰囲気生まれました。

やる気は生活態度変える

店の品物を盗む万引きが流行するような地域では、まず陰日なたを使い分けようとする暗い態度を無くさせなければなりません。授業中もひそひそと私語を交わし、指名しても笑われまいと身構え、発言したがるらないものです。仲間を作って陰口をささやく姿も目立ちます。

先生方に生徒の問題点をあげてもらおうと、裏表を使い分ける暗さが誰からも指摘されました。そこで堂々と自己表現をする音楽や美術に力を入れました。私も全校合唱で範唱し、タクトを振りました。また全校朝会の中へ生徒の自由発表を取り入れました。講話の後、わずかの時間質問や意見のある人は発表しなさいとうながしました。回を重ねる内に1年生から手があがりました。

意見の中に「雪の日に昇降口から帽子をかぶったまま教室へ行く人がいますが、廊下は帽子をとる方がよいと思います。皆さんどう思いますか」というのがあり、「賛成の人」と言うと7割ほど手をあげ、翌日から改まるというふうでした。また「渡り廊下に雪が吹きこんですべてあぶないがよい工夫はありませんか」との発言があり、参列していた主事さんが家から古材を運んできて雪よけを作ってくれました。このように生徒の発想で学校が変わることも、ありがたいことでした。

「私はこんな落とし物をしましたが」と発表して本人にもどった例もありました。私は全校に何でも言える家庭のような学校にしたかったのです。

自問清掃について、こんなやりとりもありました。

「声を立てない清掃だと、やりにくいことがあります。必要なことは小声で連絡してもいいですか」

「それはどんな場合ですか」

「大きな机はひとりで運べないから友達に頼むときです。」

「でも私は声を出したくないですね」

「校長先生ならそんな時どうしますか」

「人を呼ぶ時のことを考えてみてください。私は机の端にてをにかけていて友達を呼ぶことになります。その瞬間、私は働いていません。友達は仕事を中断させられるのです。働いていない人が働いている人に言いつけるのですから、あまりきれいではないでしょう」

「それならどうするんですか」

「私なら端に手をかけたまま誰か持ちに来てくれないかなあ、という顔をして待っています」と言うと、皆どっと笑いました。

「その方がきれいでしょう。そう急ぐことはありません。たぶん仕事の切れめのよい人が気づいて持ちに来てくれるでしょう。誰も来てくれないかどうか、1週間ためしてみただめだったら考えよう」こう答えて次の週に尋ねてみると皆持ちに来てくれました、ということで結局黙って働けるということになりました。

以前は庭の草をとる時など、数人ずつかたまわって働いていました。めいめい仕事が見えてくるにつれて、一人ひとりばらばらになり、遠くからもその違いがわかるのです。自分で選んだ仕事に立ち向かうので、次第に孤独に耐えられるようになるのです。

このように依頼心が消え、集中力が増し、やる気が育つと、生活態度も変わります。帰るとすぐおやつ、まんが本、テレビによりかかっていた子が、スイッチを切って学習に取り組むなど、時間をコントロールするようにもなりました。

声のない静かな清掃

15分間声のない静かな清掃になるには、徐々に自分から変わろうとするので、早くて3カ月、遅ければ半年はかかるでしょう。これが軌道に乗ると目に見えて耐性が育ちます。授業中の私語も自然に消えてしまいました。

秋の避難訓練の際に、はっきりと成果が現れました。休憩時間に火災が発生したとの想定で駆け足で校庭の一隅に集合する指令を發しました。

全校600名の生徒が各校舎から走り出て2分50秒後に一糸乱れず整列が終わり、報告が完了したのでした。この間声を發する者はひとりも居ませんでした。前年には騒然とわめきながら最後まで注意されてやっと整列したのに、別人のように見事な変わり方なのです。まず先

生方が異口同音「驚いたねえ、変わりましたねえ」と喜び合いました。

すべて日々の実践の積みあげの中で、生徒自ら身につけてきたものでした。このがまんとやる気、つまり意志力を身につける第1段階を体験した子供達は次のような感想を綴っています。

「自問活動は自分の心を強くするためのものだということがわかってきた。宿題がなくても自分の心に問いかけてするようになってきた」

(小5男)

「もう班長も清掃係もいらなくなった。みんなの心がひとつになり、一生懸命にやった後は実にはれればした気持ちだ。この気構えを家の仕事にも、また授業にも取り入れていきたい」

(中1男)

「私もはじめはペチャクチャしゃべっていました。他人への迷惑など考えてもみませんでした。他人への迷惑など考えてもみませんでした。でもこうして黙ってできるようになり、他人の立場になってみると、近くのおしゃべりがとても気になってきました。今まで平気で人に話しかけてしまったことを思うと、とても迷惑だったんだなあ。なぜ話しかけていたんだろう。つくづく悪かったと思えてくる」(中2女)

「最近はずごく掃除が楽しくなってきました。たぶんそれは私に意志力がついてきたからだろうと思います。本を読むにも、前は集中力に欠けていて、すぐにあきてしまうことが多かった。けれども今は、いったん読み始めると最後まで読まなくては気がすまないまでになりました」

(中3女)

(次号へ続く)



最近の動向のうち、私が関わっているものについて紹介しておきます。

大坂では昨年度『自問清掃教育研究会』が立ち上がり、全5回の研究会が開催されました。この会の発起人は、山本健治(フリーライター)・深澤英雄(学力研常任委員長)と平田の3名です。今年度は4回開催される予定で、すでに5月に第1回が実施され、第2回は8月10日の予定です。原則として毎回講話を入れることにしており、第1回には東大阪市立池島小学校長福井敦子さんから「自問清掃と学校経営」と題してお話を伺うことができました。校長としての学校経営に対する熱い想いや構想の中で、自問清掃がどのように位置づけられているかを知る貴重な時間となりました。第2回の講話としては、千葉から駆けつけて下さる日吉慎一さんが「小学校での実践事例」をご自身が発行されていた学級通信などを提示しながら具体的に話して下さる予定、また平田が「自問清掃と諸学(2)一発達心理学」を予定、この他にいくつかの実践レポートの検討が予定されています。第3回以降の会にも、毎回発起人の講話が予定されています。

私が関わっている九州地区での実践は、大分・福岡・佐賀を中心に確実に広がりつつあります。佐賀嬉野の小中学校では数年前から実践されてきていますが、最近の大きな動きとして、多久市多久中央校での小中学校あげでの取り組みがあります。この学校は全校児童生徒が1000名、職員が70名の小中一貫校で、この4月から一斉に開始、今一つ目の大きな山場にさしかかっているようです。これだけ大きな規模の学校、

しかも小中一貫校での取り組みは前例がなく、今後どのように展開されていくか注目しているところです。中学生の中から、かつてない内面的な深さをたたえた姿が出現してくることを期待します。

太田春美校長からの報告では、課題としては3点「○やる気のない児童・生徒への指導、○自問ノートへの指導、○意識付け、道徳の授業との関連」に絞られるとのこと。「本校の児童生徒の実態からして、自問清掃に取り組みもうと考えた時点で行き当たるであろうと予想された壁(課題)に順調に行き当たっているといった状況かと考えております。どの学校も、取り組みば一度は行き当たる壁でしょうから、慌てることなく、自問清掃の中央校バージョンづくりに、今後も一步一步取り組んで行きたいものです」と、現状を冷静に分析されています。まったくそのとおりです。「概して、小学部職員は手ごたえを感じており、中学部職員の一部は、時間確保や労力の割に生徒の変容があまり見られないなど、課題を抱えている状況です。自問清掃をやめようという声は聞きませんが、もっと本校の実態に沿ったやり方を工夫したらどうかという大方の意見だと理解しております」とのこと。

ところで九州のT先生からは、次のような報告がありました。参考になる点が多く考えさせられる内容だと思うので、少し長くなりますが紹介させていただきます。

実は、本校では自問清掃の看板は下ろしました。昨年度末、校長より自問清掃の中身を少し変えたいとの提案がありました。簡単にいうと、

無言で清掃をし、ノートに振り返りを書くという形式は変えないが、清掃の中に（集団的自衛権の論議のようですが）最小限の「賞賛と指導」をいれていきたいということでした。呼び方は「自問清掃」という提案でした。

清掃中は無言を求めながらも、性善説の上にならなくて子どもの気付きを大事にする、そのためには、直接的な指導（叱責）や賞賛（子どもをほめてのばすための）は、控える、我慢するということが自問清掃の肝要な点だと、私自身はとらえていました。しかし、校長から見て、今までの実践では子どもは育たない（掃除をしない、内省はむずかしい）という判断であったようです。（たしかに、一部、掃除が成立しない子どもたちの姿はみられました。）子どもは、指導と賞賛なくしては成長しないという結論であったようですので、提案を受けて、私は「それならば『自問清掃』という看板はおろすべきだ」と主張しました。異論はあろうかと思いましたが、子ども観（人間観）・教育観に関わる重大なポイントだろうと判断しました。そこで、昨年度の担当として、本年度の清掃の提案をするときに、「キラキラ清掃」とネーミングすることを提案し、確認をしました。

わたしとしては、もちろん不本意ではありましたが、校長の管理運営事項に関わる内容でもありますし、もともと前校長の考えでスタートしたわけで、今の校長を納得させるだけの実践の成果を上げられなかった私をはじめとする過去の職員の力量不足が招いた結論であったと思います。

子どもたちには「名称を変更しただけで、そうじそのものは変わっていません」と、継続性を重視した説明をしました。が、本年度は異動の規模も多かったので新しく本校に赴任してきた職員も多く、掃除中の指導と賞賛を含めた形で

の無言清掃を行っているというのが現状です。

自問清掃に可能性を感じていた（心ある）職員の中には、あえて（直接的な指導と賞賛）を行わずに、昨年度までと同じような「自問清掃」を実践している者もいます。せめて、心ある職員は昨年と同じ内容で実践ができるような清掃計画になるように腐心して提案したつもりです。

実は、私は学級担任も外れまして、本年度は指導方法工夫改善の担当ということで担任学級がありません。自問清掃や自問ノートの取り組みが実践できにくいポジションにいます。せめてもの実践ということで、高学年学習室の掃除を「只管打坐」の心意気で行っています。

この報告文を読むと、自問清掃の可能性と困難性、それだからこそその必要性を感じます。ここに登場する少数の「心ある職員」がいるかぎり、自問教育は滅びません。ひとたび自問清掃の核心に触れた教師は、一生涯それを手放すことはないのだと信じるからです。

愛媛県伊予西条市の方々とは、昨年度から関わりを持つようになりました。飯岡小学校を中心に展開されつつあります。発行された学校だよりの木村留里子校長の文章には感動しました。紹介されている子ども達の姿やそこからもたらされる教師としての深い洞察は、実に多くの示唆を含んでいるようです。推進役の小野基美さんを中心にさらに進化していくでしょう。すでに6月に研修会が開かれましたが、8月末には「自問ノート」の活用方法を具体的に検討する会が予定されています。

『自問清掃ネットワークいしかわ』は、野々市中学校前校長橋口有康さんを中心に昨年度発足しました。昨年8月に金沢大附属中学校で開催された会には県内8校から50名の参加者を見ましたが、事務局の中島卓二さんによると今年

度は8月8日に野々市中学校を会場として第2回が予定されています。野々市中学校は新校長を迎えていよいよ第2段階への時期でしょうし、他にも能美市など市をあげての取り組みが展開されていくようなので、石川県での自問教育はますます期待されるところです。

最後に、一昨年あたりから私が関わった学校のうち、上で触れなかった学校を列記しておきます。佐賀県嬉野市吉田中学校、大野原中学校、

岩松小学校、武雄中学校、三根西小学校、福岡県岡山小学校、忠見小学校、大分県三保小学校、岡山県岡山市妹尾中学校、長野県中野市高社中学校、大阪府池島小学校、摂津市味生小学校、埼玉県上尾市南中学校。この他に、学校単位ではなくても、心ある先生方による自問教育実践がすすめられています。そういう本物を求める少数をこそ、わたしは信じたいと思います。

《編集後記》

11月29日30日の2日間にわたって行われた、全国自問教育の会も全国各地より参加者を集めて無事に終わることができました。動員などで人を集めるのではなく、純粋に自発的に学ぶ意欲で集まるこの会に関わらせていただき、5年の月日が流れました。私も導かれるようにこの会の事務局を務めさせていただき、3年が経ちましたが、まだまだわからないことばかりで、事務局会などがあるたびに教えられることがたくさんあります。

今号でも竹内隆夫先生の本が書かれた「実践の中で自らを高める自問教育の手引き」に多くのページを割きました。竹内先生の残された文章に触れることは、教育に傾けた情熱に触れることだと感じています。先日、長野市に訪れた際、信州大学前の古本屋で「精神性を高める教育」という竹内先生の本と出会い迷わず購入しました。竹内先生が高社中学校に赴任され、日本一の学校にしたい！との思いで生徒と向き合ってきた記録がそこには書かれています。教科を問わず指導案を書き、自ら授業をされた記録が残っています。そこには人間竹内隆夫が行う教育の力と愛で溢れています。「お前はなぜ子供の前に立ち授業を毎日しているのですか？」と問われているような気がしてくるのです。

平成26年度の全国自問教育の会は、長野県松川町立松川中学校での開催が決定いたしました。各地での自問教育のネットワークやサークル活動も広がってきています。人間教育の根っこを太らせるようなそんな語り合いが今年も行われることを今から楽しみにしています。

(文責:片岡)